全国歴史教育研究協議会第58回研究大会（東京大会）報告（世界史）

舞岡高校　中山拓憲

今年度は7月26日（水）～28日（金）の3日間、「歴史教育の今後在り方を考える～いまからそしてここから新しい歴史学習が始まる～」というテーマでなかのＺＥＲＯホールにて行われた。26日（水）、総会～分科会。27日、シンポジウム（第一分科会）～記念講演。28日、史跡見学であった。初日の分科会は4つに分かれており、第2、第3分科会が日本史、第4、第5分科会が世界史であった。私は26日（第4、5分科会）、27日に参加したので、それについて記す。

第4、5分科会について

〔金間聖幸（埼玉・浦和東高校）「ヨーロッパ封建社会の崩壊で、なぜ国王だけが生き残ることが出来たのか」〕（第4分科会）

埼玉県はここ数年ジグソー法に力を入れてきた。金間先生が報告した実践は、その中でも完成度の高いものであった。字数の関係でジグソー法については詳しくは延べないが、教員の高度な準備が要求される授業である。金間先生の授業は、表題にあるように教員でも答えるのが難しい問い（最近の研究では、国王は様々な集団に特権を認めることで権力を持ったので、厳密にいえば国王だけが生き残ったわけではないのであるが、、）を、様々の視点から生徒に考えさせる、かなり面白い実践であった。しかし二の足を踏んでしまうのは、同様の授業をやろうと思ったときに、準備が大変だと思ってしまうからだ。それを解決しようとしているのが、次の鈴木先生の実践である。

〔鈴木智和（東京・工芸高校）「鉄砲伝来のルーツから考える世界の一体化と日本」（第4分科会）〕

日常的にアクティブ・ラーニングを行うためには、準備が大変すぎるとできない。そこでどうやったら気軽にできる実践できるのかという報告であった。日常的な授業を改善してこそ、本当の意味での授業改善だと感じた。とは言え、アクティブ・ラーニングをできるのは、学力の高い生徒だけではないのかという話はよく聞かれる。それに対する答えが、次の吉弘先生の実践であった。

〔吉弘雄飛（東京・五日市高校）「定時制高校におけるＡＬ型授業の実践～産業革命後の労働運動～」（第5分科会）〕

定時制の生徒に、アクティブ・ラーニングをさせる報告であった。先生の実践は、4年間かけて少しずつ、主体的に取り組める生徒に育成していき、最終的には、100字程度の作文まで書けるようにさせるという内容であった。

3名の報告を通じて実感したことは、授業改善は出来ないと思うから出来ないのであり、工夫や根気次第で、出来ることは多いと言うことである。

記念講演：樺山紘一（印刷博物館館長、東京大学名誉教授）「印刷文化への／からの旅」

グーテンベルクが発明した活版印刷術についての講演であった。当時アジアで発明された印刷術がヨーロッパに伝わり、グーテンベルクが改良したと考えがちだが、その証拠はどこにもないという話に驚いた。そして、印刷術という一つの技術があるのではなく、金属活字、油性インク、印刷用紙、印刷機などさまざまな技術の集合であり、それを発明した、グーテンベルクは驚くべく存在だという。歴史は丁寧に見ていかないといけないと言うことを実感する講演であった。

まとめ

我々教員は、新しい時代にあった歴史教育を担っていくことが求められているが、この大会では、その糸口に多く出会える。新しい授業をしたいと思う意欲的な教員にとっては、行くべき価値のある会だといえるだろう。